「スギハラ・ダラー」のジェンス戦争

「スギハラ・サバイバル」のメラメド氏(左)

第二次大戦下のリトアニア・カウナスで領事代理を務めた杉原千畝。ナチスドイツによってヨーロッパ大陸を追われたユダヤ人難民に、独断で日本の通過ビザを発行、およそ6000人の命を救い、海外では「東洋のシンドラー」と讃えられる人物である。

彼の計らいによって救われた人々は、のちに「スギハラ・サバイバル」と呼ばれることになった。

「杉原が戦後世界の礎たる自由の種を蒔き、またスギハラ・サバイバルによって新たなドルの世界が生まれたことを知ってほしかった」

と語る手嶋氏が、本著を手がけるきっかけとなったのも、一人の「サバイバル」との出会いであった。

「NHKのワシントン支局長だった1999年、取材のためラムズフェルド元国防長官をシカゴに訪ねた際のことでした。地元出身の彼は、会合の場で、『あそこにいる男を知っているか。俺なんかシカゴではまだひよっこだ。あれこそ、マーカンタイル取引所の大物さ』と私に語りかけてきたのです」

そこには、米国で「金融先物取引の父」と呼ばれるレオ・メラメド名誉会長の姿があった。87年10月のいわゆる「ブラックマンデー」当日、世界中のマーケットが機能不全に陥る中、シカゴのマーカンタイル取引所だけが市場を閉めずに取引を続けていた。かねてよりその事実を謎と捉えてきた手嶋氏は、長年の疑問に答えうる人物と、偶然にも対面を果たしたのだ。

「メラメドに向かって私はこう問いかけました。『世界の終わりの日に、どうしてマーカンタイルはゲートを開け続けたんですか』。すると彼は『どんな津波が来ようと、マーケットを閉じようなどとは露ほども考えなかった。なぜなら、俺は〝スギハラ・サバイバル〟だからだ』と言うのです」

手嶋氏自身も「スギハラ・サバイバル」という英語の成句が存在していたことを、その時初めて知ったという。

「スターリニズムとナチズムという、現代史の中で最も凶暴な2つの全体主義の狭間から杉原の命のビザによって生き延びた彼にとって、『自由な取引』は市場を担保する至上の存在。この自由こそが、アメリカをアメリカたらしめる根源だった。先物取引をいち早く開発し、いわば資本主義の切っ先、自由の先頭を走るマーカンタイルを、自らの手で閉じるなど思いもしなかったというのです」(同)

くしくも今年は杉原生誕110年、そして命のビザ

『ウルトラ・ダラー』から4年、手嶋龍一氏による続編『スギハラ・ダラー』が小社から刊行され、ベストセラーになっている。「命のビザ」で知られる外交官・杉原千畝の救った難民と、「インテリジェンス」が織りなす歴史の深淵から、進むべき近未来が窺える著作である。

[特集]手嶋龍一

命のビザ「杉原千畝」知られざる「インテリ

「命のビザ(左上・「人道の港 敦賀ムゼウム」提供)

発給から70年にあたる。本著では、杉原の遺した足跡を忠実にふまえ、メラメド氏がモデルと思われる登場人物らが織りなす物語がリズミカルに活写されていく。刮目すべきは、杉原の、ヒューマニストと表裏一体をなす側面。手嶋氏は、日本史上稀有な「インテリジェンス・オフィサー」であったと評するのである。

「日本語には『インテリジェンス』を表す言葉がありません。『インフォメーション』ともども『情報』と訳されてしまいますが、2つは全く違う。世に溢れる膨大な情報を指すインフォメーションを収集して選り抜き、分析して意味を読み解いた結果、近未来を指し示す力を持ったものこそが、インテリジェンス。その社会において、杉原がいかに優れた人材だったかということは常識になっているのです」

ソ連が入国拒否した実力

その手腕を物語るのは、たとえば以下に述べる歴史的事実である。外務省外交史料館課長補佐の白石仁章氏が解説する。

「杉原は外務省留学生として1919年に満州のハルビンに渡り、ロシア語を学びました。現地で白系ロシア人と親交を結び、ロシア人社会に溶け込み、その後20年にわたって培われる諜報網の礎を築いています。彼がいかにソ連に精通していたかを端的に表しているのは、26歳でまとめた大著『「ソヴィエト」聯邦国民経済大観』。これは、600ページにわたって当時のソ連の経済事情を詳しく分析したものです」

杉原がその調書を書いたのは1926年。日本とソ連が25年に日ソ基本条約で国交を回復してからわずか1年で、これだけの分量を著したことになる。

当時、情報戦の最前線であったハルビン。現地で総領事館書記生などを経て、32年に満州国外交部事務官となった杉原は、対ソ連の北満州鉄道譲渡交渉で辣腕を振るうことになる。そのインテリジェンスの源について、

「杉原を全面的に支援したのは、妻の家族です」

と言うのは、杉原千畝研究会代表の渡辺勝正・大正出版社長である。

「当時の杉原の妻はクラウディア・セミョーノヴナ・アポロノヴァというロシア人でした。その家族は元々、ハバロフスク出身で、生活に困ってハルビンに出てきた。そこでクラウディアと杉原は出会い、結婚に至ります」

白系ロシア人コミュニティに連なっていたアポロノフ一家。その人脈を駆使してソ連の鉄道が老朽化している事実などを突き止めた杉原は、ソ連側の提示額を大幅に下げさせることに成功した。

「最終的に、ソ連側の6億2500万円という要求額

は5分の1程度の1億400万円まで下がり、交渉はまとまりました」(同)

杉原の実力をソ連が十分に評価していた裏付けとして、1936年のできごとが挙げられる。同年、外務省は杉原を在ソ連大使館に赴任させることを決定。が、対してソ連は『ペルソナ・ノン・グラータ』(好ましからざる人物)を発動して杉原の入国を拒否、モスクワ行きを阻止したのである。

「当時の国際慣例としても極めて異例のこと。赴任後に活動を邪魔することがあっても、そもそも赴任すら拒絶するのは非常に珍しい事態でした」(手嶋氏)

ソ連側は当初「杉原には好ましからざる理由がある」との一点張り。日本側の再三の要求によってようやく「白系ロシア人との接触」という根拠を出してきた。が、具体的な行為については触れずじまいだった。

「ソ連はそれ以上の内容を調べることができなかったのではないか、と思われます。杉原は満州国外交部を離れる際も、情報源を守るために自ら職を辞しています。満鉄の交渉後、優秀ゆえに関東軍からスパイ活動に従事するよう命じられるのですが、それは自ら築いた白系ロシア人の情報網を危険にさらすことを意味していました」(白石氏)

情報網の秘匿はインテリジェンス・オフィサーの鉄則。杉原は、身を挺してネットワークを守ったのである。

軽視された「独ソ開戦」打電

白石氏が続ける。

「ソ連に赴任できなかった杉原は、フィンランド勤務を経て、39年にリトアニアのカウナスで領事代理に任命されます。ここで彼は、ポーランド諜報機関と協力関係を構築し、対ソ情報網をより強固なものへとしていきます。『日本・ポーランド関係史』には、ポーランドのインテリジェンス・オフィサーが集めた亡命政府への情報を、杉原が日本の外交ルートを通じて届け、信頼を勝ち得た、との記述があります」

そして40年7月、杉原は緻密な計算のもとに、ユダヤ人避難民を救うべく本国外務省に半ば無許可で命のビザを発給。翌年にはケーニヒスベルク(当時ドイツ領)総領事館に赴任し、対ソ情報収集の最前線に投入され、ポーランド諜報機関の協力を得て独ソ開戦の証拠を摑むことに成功した。

「生死をかけて情報を摑んだ杉原は、41年5月9日発の電報で詳細に報告を行っています。しかし、軍部はこの情報の重要性を理解したとは言いがたく、ドイツ側が杉原を他国へ勤務させるよう要求したこともあって、同年11月には在ルーマニア公使館へ転勤。インテリジェンス・オフィサーとしての足跡もここで途絶えることとなるのです」(同)

歴史に「if」は禁物という。が、この打電の扱いが大戦の帰趨を変えた可能性はゼロではなかろう。

杉原は帰国した47年、外務省を退職。以後は語学力を駆使してさまざまな職に就き、86年、86歳の生涯を閉じた。遺族の一人によれば、

「几帳面さとユニークな面を併せ持った人でした。規則正しい生活を好み、夕食の時間を聞くので『6時です』と答えると、本当にピッタリの時刻に食堂に現れる。一方で、お湯を沸かそうとしたのに水を入れ忘れて薬缶を焦がしてしまったり、孫が風邪をひくと3日分の薬を1日でのませてしまったり、ということもありました」

あまたの峻烈なインテリジェンス戦争をくぐり抜けてきた杉原の、これもまた一面である。

本著の底流にあるインテリジェンスの「本質」について、手嶋氏は言う。

「国家の指導者が、国を左右どちらに導くかの意思決定に役立てるからこそ、インテリジェンスとは死活的に重要な要素となります」

指導者がインテリジェンス・オフィサーに対して自身の関心を伝えることで、新たな情報のサイクルも生まれるのだが、

「明治期以来、長く蓄積されたサイクルが花開いた結果、杉原という世界的にも第一級の人物が出てきた。インテリジェンス感覚は日本人の遺伝子に脈々と受け継がれているのです。が、現代日本で鳩山内閣を見た時、例えば普天間の問題一つとっても、インテリジェンス・サイクルが作動していないだけでなく、そもそも機能として存在しているのか、とさえ疑問に感じてしまいます」(同)

70年前に蒔かれた自由の種は、今も世に警鐘を鳴らし続けているのである。